

私の戦争体験

当時、東村立東国民学校の教師をされていた川田さんより寄稿いただきました。

二つのお弁当

総社町 川田 澄江



昭和19年4月、私(旧姓・山村澄江)は現在の東小学校の前身である東村立東国民学校に赴任しました。

毎朝、職員会議を終えると東校舎から欄干の無い橋を渡り西校舎へ向かうのが日課で、雨降りの日は傘をさして校舎間を往き来したものです。3教室しかない小さな西校舎でしたが、私は二年女組(二年までは男女別学級)担任として、七十人学級という大所帯を受け持ちました。全員が可愛いオカッパ頭で澄んだ瞳の女の子達です。教室の黒板頭上には、片仮名でダウギ(道義)、キャウエイ(共栄)、ケンカウ(健康)という校訓が堂々と掲げてあったのを鮮明に覚えています。

二年生は4時間目が終わると下校になります。掃除当番の子供だけはお弁当を持ってくることになっていました。しかし昼休みになると、そのうちの何人かが教室から静かに出ていく、そんなことがしばしばありました。

非農家の子供の一部は、家庭の事情でお弁当を持参することができず、他の子供が食べ終わるまで黙って廊下の片隅で待っていたのです。

食糧難の戦時中とはいえ、そのあどけなく、けなげな姿が不憫でならず、いつも心を痛めていました。

実家が農家である私は、ある日大きめのお弁当二つを持参し、「○○ちゃんたち、一緒に食べよう！」と誘い、それらの子供達と僅かばかりの食事を分け合ったことがあります。おかしは

芋の煮転がし、梅干し、沢庵、そんな質素な中身でしたが、子供達は目を潤ませながら口々に「先生、美味しい！」と頬張ってくれました。

数日後、一通のお便りが届きました。一緒に食事をした子供の母親からです。丁寧なお礼とともに感謝の心情が達者な筆遣いで滔々と綴られており、今でも思い起こすたび涙が溢れてきます。戦争さえなければ、あの子たちもひもじく寂しい想いをせずに済んだらうにと。

終戦までもう間近という昭和20年5月、優しかった兄が陸軍通信兵として駐屯していた福生飛行場(現在の横田基地)で、敵機の機銃掃射により戦死を遂げました。教え子の中にも父親やご親族を戦地で失った人がいたと聞きます。しかし、辛くても人前では愚痴一つこぼすことさえ許されず、ひたすら耐え忍ぶ、当時はそんな日々を誰もが精一杯に生き抜いていたのです。

終戦後、民主教育も芽吹き始めた新制の東小に昭和二十三年三月まで勤務しましたが、七十数年経った今でも、当時の教え子や同僚の顔、出来事が心の中から消え去ることはありません。



昭和23年2月群馬郡東村立東小学校(※)の5年生と川田さん(前列の左から3番目)

※昭和22年学制改革により東国民学校から改名

平成二年発行、「私の戦争体験」風化したために「第二集」より再掲。

空腹の思い出

匿名希望



「今日は売ってもらえたよ。」
炎天下自転車でもどこまで行ってきたのか、父は小さな袋を荷台から下ろした。米でも麦でもない、麩(ふすま)だ。文字どおりの麦の皮。小麦粉をひく時の皮かすを、少々分けてもらうため、父や母は、たんすの底からその日は何を持ち出したのだろう。

麩は水でこねてもまとまらない。わずかなご飯か、小麦粉をつなぎにして辛うじて形を整え、焙烙(ほうろく)で焼いた。生味噌をこね込むか、またはつけて食べる時の子どもたちの嬉しそうな顔。父母の分までは回らなかったのかも知れない。勿論、子どもたちも空腹の夢は叶えられない。一度でいいから満腹してみたいといつも思っていた。

わずかな菜園に、母がカボチャやサツマイモを作った。収量の多い品種を選んだせいか、どちらも、実のしまらない水っぽいものだった。でも、カボチャが主食の日には腹八分目くらいの満腹感があった。
二センチ程の厚さに輪切りにした芋と米と麦を混ぜて炊くご飯。炊き上がると、芋の表面に米や麦がまばらにはりついてくる。これは弁当箱につめていくことができる上等の食事であった。

群馬会館食堂へ雑炊を買いに行った。なぜそこまで出向いたのか、配給切符(※)を持って行ったのかどうかはもう記憶にない。地上の列が、少しずつ進み、ようやく地下への階段へ足がかかった時、「今日はおぶれないな」と安心した。ようやく自分のものとした弁当箱一ぱいの雑炊は、予想以上に汁気の多いものだった。紅雲町の前女の近くまで、どのように持ってきたのだろうか。自転車は持っていなかったのだ

から、そろりそろり持ち帰ったことだろう。家族六人でのように分けたのか、記憶のたぐりようもない。

菜園や庭に作った大豆は貴重な栄養源だった。煎り豆にして茶筒に保管し、時折、一つかみずつ分けてもらっておやつにした。水に浸してご飯に炊きこんだり、祖母の家の石臼できな粉にひいたりした。

お赤飯のような色をしたコウリヤンもこの頃食べた。プツプツして噛みにくかった。これも配給品だったのだろう。

学徒動員で出向いた新前橋の理研工場食堂。週何回か私たちにも与えられたおかずのうち、ひじきの煮付けが印象に残る。鯨肉や大豆が入ったこの煮付けは、すばらしいご馳走だったように思う。

すいとん鍋の、どろりとした汁を拭うようにとって洗い始める。食後の胃袋も満たされてはいない。少女雑誌の小説の台詞「鍋には線切り大根一本もへばりついてやしない」という主人公の空腹を共感しながら洗った。空腹で意地きたなくなる自分に「餓鬼」の気持ちを感じたりした。

先日、ある集まりで握り飯を作った。それかくしの一言二言を言いながら、空になった飯台の飯粒を拾って口に運んだ。若い人たちに嫌われそうなことだが、ついしてしまうのだ。「もったいない」のである。四つ五つ飯台を洗ううち、洗い流された飯粒は茶碗一ぱい分はあった。複雑な気持ちで、生ごみのビニール袋に入ったご飯を見つめた。

飽食日本。お金さえあれば、何でも自由に手にすることができると今日の幸せは末永く保証されているのだろうか。人類みんなが満腹しているわけではないのに……
老婆心が騒ぐ。



(※) 配給切符のうち、衣料品を購入するための衣料切符。各個人への配給点数は決められなかった。

市立図書館 東分館 新刊案内

【一般書】

・世界▽夢の映画旅行 / Filmarks

・自宅でキャンプ / 樵出版社

・アフターコロナ世代の子育て / 山田 真

・天使のいる廃墟 / フリオ・ホセ・オルドバス

・黄色い夜 / 宮内 悠介

【児童書】

・プラスチックのうみ / ミシエル・ロード

・きんぴらきょうだい / 荻田 澄子

・かいけつゾロリのまいにちなぞなぞ1年分 / 小野寺 ぴりり紳

・ルドルフとノラねこブッチー / 齊藤 洋

・ザ・ランド・オブ・ストーリー / ゴズ / クリス・コルファー

■休館日 毎週木曜日

※現在、読み聞かせ等のイベントは開催未定です。

